

「〇〇・関西」の 心意気を持って

親分肌の新宮会長、知将然とした秋山会長、野武士の風情をもつ下妻会長。3人の会長に多くのことを教えていただきながら10年務めた関経連副会長を、京都商工会議所会頭就任に伴い、今年5月に退任しました。京都代表の副会長は関経連と京都産業界それぞれの思いを双方に伝え、関西の発展につなげるのが役割。この役割を果たすことで、私自身、視野を関西全体に広げるとともに、産業界のみならず行政や政界の方々と人脈を作ることもできました。この人脈は、私個人にとって貴重な財産であるのはもちろんのこと、今後、京商会頭としての仕事にも役立つと確信しています。

副会長として私がかかわったプロジェクトのひとつに関西文化学術研究都市(けいはんな学研都市)があります。まずは(株)けいはんなが皆さまのご支援により、新しいスタートを切れたことに改めて御礼申しあげたいと思います。けいはんな学研都市はマスコミに何かとネガティブに取り上げられてしまう面もありますが、都市建設というハード面はもちろん、新技術・新産業創出といったソフト面でも着実に進化を遂げています。中小・ベンチャー企業の立地も増え、研究機能だけではなく、開発型生産機能を持つ都市になりつつあり、「産業化」が進んでいます。東大阪や北京の中関村科技園区との交流など「広域化」や「国際化」の道筋も見えています。また、第二京阪の部分開通や近鉄けいはんな線の開業などにより交通アクセスも改善してきました。

次に取り組むべき課題は研究内容やその成果の「見える化」。この点は、関経連にも一層の支援をお願いしたいですね。「研究分野が多様で特徴が見えない」「成果がわかりにくい」との指摘は以前からありました。しかし、この「多様性」こそがけいはんな学研都市の特長なのです。新たな科学や技術は、現在の技術や考え方の複合や融合から生まれるもの。けいはんな学研都市の「多様性」は科学や技術の発展に必ず貢献するはずです。



立石 義雄 氏

Yoshio Tateisi
オムロン会長

「高い文化と学術を有する創造的都市はその時代の産業に革新を起こす」は私の持論です。長い歴史と生活文化を有する関西、なかでも京都はそのポテンシャルを十二分に持つ素晴らしい都市ですが、京都だけでは成り立ちません。そのことを心にとどめ、私は、関西の中の京都、つまり「京都・関西」という視野や思いを常に持ち行動してきました。それは京商会頭に就任した今でも変わりません。同じことが関西の他の都市にも言えるのではないのでしょうか。各都市が「〇〇・関西」の意識を持ち、それを言葉や行動に出していくことが今後の関西には必要です。また、次の20年、30年の関西の成長を考え、人口減少に伴い縮小する国内内需と成長著しいアジア内需を合わせて「連結内需」ととらえた取り組みを真剣に検討すべき時期にきているのではないのでしょうか。そのためにアジアとの相互交流を各分野で促進する戦略や仕組みを考えることもこれからの関西に求められています。

関経連の「関西ビジョン2020」にもうたわれているように、関西には、安心・安全・環境・健康といった人間生活の本質に関係する課題の解決や低炭素社会、持続可能社会の実現に向け、世界に貢献できる突破力もチャンスもあります。未来の我々の働きがい・生きがいにつながるこの大仕事の第一歩は、やはり「〇〇・関西」の心意気で関西がひとつになることなのです。

談